

「困難が山積みでも、不可能はない」

1966年、インドに初めて青年海外協力隊が派遣された。その一人、杉本サクヨさんは、以後40年間、インドとともに人生を歩んできた。自身を突き動かしてきた国際協力への思いは、今なお決して衰えることはない。



文・写真 = 谷本 美加 (写真家)
text and photos by Tanimoto Mika

初代協力隊員として インドへ

今から40年前の1966年、羽田空港からインド・ニューデリーへ飛び立つ飛行機の中に、初代青年海外協力隊員の一人、杉本サクヨさん(当時24歳)がいた。時代は、日本の戦後復興がようやく終わったばかり。民間人がボランティアで容易に海外へ行けるような状況ではなかったはずだ。「客室乗務員は振り袖に扇子でした。また圧倒的に欧米人乗客のほがが多かったですね」と杉本さんは振り返る。

短期大学を卒業してから約2年間、神奈川県で中学校の理科教師をしていた杉本さん。「電気の実験なんか、全然分からなくて、失敗ばかり。もう大変でした」。そんな新米教師の彼女に、突然友人が電話で青年海外協力隊の話を持ちかけたのだ。「私、それやりたい」とその場で決めて、即応募。そして合格。派遣先がインドと知らされたとき、未知の国に俄然興味がわいたという。異国情緒あふれる長崎で生まれ育った杉本さんにとって、外国はそう遠い存在ではなかつ



1967年、デリー市内で栄養調査を行う青年海外協力隊時代の杉本さん(『人づくり 国づくり 心のふれあい』JICA)

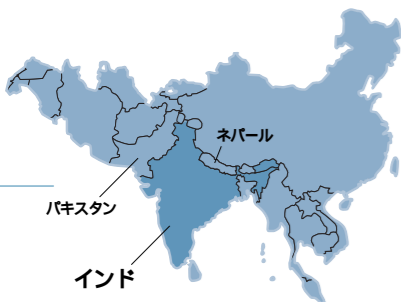
た。40年前のニューデリーは静かで、鳥のさえずりが聞こえるような町。杉本さんは、レディー・アーウィン大学の栄養科で栄養士として活動を開始した。ところがそこは、裕福な家庭のお嬢さまが通う大学だった。日本では6畳一間で生活していた杉本さんは、女子学生たちの優雅で上品な暮らしを知って、複雑な思いになる。「私、『こんなところで協力隊が活動するなんて、間違っている』って、当時のJICAインド事務所の所長さんに、よく愚痴を言っていました。

もっと厳しい環境で活動すると思っていたのですが、今でこそ笑って話せるのだが、インドでの初代隊員ということもあり、杉本さんの思いと実際の活動には、かなりギャップがあったようだ。

しかし、持ち前のバイタリティーが、ここで発揮されることになる。彼女の主な任務は大学での食品分析の指導だったが、「机上でつくられた栄養調査しか存在しないので、本来の調査をやるべきではないか」と学生に呼び掛けて、農村やスラムで栄養調査・分析を始めたのだ。オールドデリーのスラムで、貧しい家庭の食事風景を実際に見ながら、何をどれだけ食べたか記録していく。それは、ダニやシラミの害にあいながらの活動ではあったが、ようやく自分がイメージしていた国際協力活動に近づけた気がした。

マザー・テレサとの 出会い

そんな中、杉本さんはあるイベントをきっかけにマザー・テレサの存在を知る。大学の冬休みを利用して、まだ無名だった



Sugimoto Sakuyo

NPO法人
宮崎国際ボランティアセンター代表

杉本 サクヨ

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.010



グリーンハウスのスタッフは皆、働き者で責任感が強い。日本で農業研修を受けたことがあるスタッフもいる。「スタッフへは厳しく、そしてしっかりした人間関係を築くことが大事」と杉本さん。また、どんなに忙しくても村人とのコミュニケーションは欠かさない

彼女を訪ねた。「何も無い部屋で、質素な木のいすに座って、とても丁寧に施設の説明をしてくれました。部屋に世界地図が一つ張ってあったのをよく覚えていました」。印象に残った世界地図は、杉本さんの心の中に常にある国際協力への思いとつながったのかも知れない。

2年間のインド生活を終えて日本に帰国した彼女は、結婚を機に宮崎へ移り住むも、インドへは通い続け、マザー・テレサの施設を支援する募金活動も始めた。

17年前のある日、カルカッタ（現コルカタ）に住む友人から「マザー・テレサはノーベル平和賞を受賞してすでに世界中の人が知っているけれど、こっちはもっと大変なのよ」と聞かされて知ったのが、西ベンガル州カリリンボンにある「ドクター・グラハムズ・ホームズ」だ。それは、恵まれない子どもたちを援助するために設立された寄宿学校だった。インドをはじめ、イギリス・カナダ・スイスなど各国の運営委員会からの資金提供で成り立っているこの学校を見た杉本さんは、91年に日本の運営委員会として、宮崎国際ボラ

ンティアセンター」を設立。教育のための資金提供とともに、学生に対して農業技術教育の支援をする「グリーンハウスプロジェクト」も開始した。

とはいえ、杉本さん自身は農業の専門家ではない。「そこで宮崎県に相談したら、県の総合農業試験場でグリーンハウスのスタッフを研修生として受け入れてくれたのです。実は宮崎県では、県の施設でNGOのスタッフが研修を受けるという前例はなかったのですよ。」こうして、杉本さんの行動力と情熱に動かされた多くの人々が協力し合い、責任感の強い現地スタッフの努力があつて、宮崎県の農業専門家たちから伝授された、農場の整備・土作り・肥料・植え付けなどの技術が、カリリンボン地域で生かされるようになった。

この農業技術教育は、カリリンボンのたくさんの方々に注目され、2005年、農家への技術支援を目的とするJICAの草の根技術協力事業「グリーンハウス・コミュニケーションサービスタ」につながった。もともとカリリンボンは園芸の盛んな地域だが、農業での経済的自立が難しい。そこで、気候に合った花や野菜

の開発、栽培方法の改良、収穫物の集出荷、加工作業までを視野に入れ、農家の収入増大や女性の自立支援などを目指している。

「インドは私のふるさと」

かつて荒地だったグリーンハウスの敷地内に、今では各種の蘭や、香り漂うスイートピー、フリージアが咲き誇り、白菜・イチゴ・グアバ・コンニャクイモなどさまざまな野菜・果物の試験栽培が行われている。「途中で生育が悪くなったり、いろいろな病害にあつたりしました。何とか皆さんの力でできるようなつたところですよ」と花々を前に話す杉本さん。その傍らで、宮崎県総合農業試験場に勤務していた農業専門家の河野善幸さんが、日本の40年くらい前の技術が、ここでは役に立つのですよ。アリの被害で作物がだめになったり、予期しないこともたくさん起こりますが、「と苦笑

する。

技術的なことは河野さんら専門家に任せられるが、宮崎国際ボランティアセンターの組織運営は、杉本さんの小さな両肩にすべてかかっていると聞いてい

のですよ。当時の苦しい時期を振り返りながら、「自己犠牲、多くの人の出会い、寄付や協力を募るための行動力が、NGOの責任者に必要な要素だと思います」と付け加えた。

だが、生まれ故郷の長崎で原爆を体験している杉本さんにとつて、「平和というはお互いの協力・共生によって築いていくもの」。そのためには、インドでの支援活動と同時に、日本国内での国際協力啓発活動も欠かせないのだ。



農業専門家の河野さん(奥)と、グリーンハウスのスイートピーの状態を確認する杉本さん。スイートピーの育て方は、宮崎県が先駆けて始めた「つるあげ栽培法」

「困難山積みでもインドに不可能はない。そんなところが私に合っている」と言う杉本さんこそ、常に難題に立ち向かう「パイオニア」そのものだ。



杉本さんを見つけて駆け寄ってきたドクター・グラハムズ・ホームズの少年。杉本さんは、インドに行くに必ず奨学金を支援している子どもたちに会う。この学校の特徴は9つの民族が集まっていること、また、教育レベルの高さは各国で評判になるほどだ

平和はお互いの協力・共生によって築いていくもの

Sugimoto Sakuyo

すぎもと・さくよ NPO法人宮崎国際ボランティアセンター代表。1942年長崎県出身。聖セシリア女子短期大学(家政科)卒業。66年、初代青年海外協力隊員としてインドに派遣され、レディー・アーウィン大学で食品分析と栄養調査指導の活動を実施。以来、インドとの交流・協力活動が続いている。マザー・テレサの「ミッションナリーズ・オブ・チャリティー」の支援を長年行った後、91年から学校福祉法人「ドクター・グラハムズ・ホームズ」の日本委員会として運営に加わり「宮崎国際ボランティアセンター」を設立、子どもたちの教育事業に携わっている。